

主な未侵入病害虫の解説

pear stony pit disease

分布地域 ヨーロッパ、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュー・ジーランド

寄主植物 ナシ属植物

病原体 接木によって容易に伝搬され、電気泳動でウイルス由来のRNAが確認されること等からウイルス病であると言われている。最近では、apple stem pitting virusの1系統ではないかとの報告がある。昆虫伝搬や種子伝染についての報告はない。

病徴 果実の病徴が特に顕著である。落花後10～20日の幼果に濃緑色の病斑が現れる。その後、幼果が発育していく段階で、病斑部分の組織の肥大が抑制されるため、周辺部との間に差が出来て、濃緑色の輪紋で縁取られたくぼみが生じる。病徴の激しいものは、果実全体が凹凸に変形したうえ、くぼみの下部の組織が硬化し、ナイフでの切断が難しくなるほどである。最終的にこの硬化した組織はえ死する。他の要因(昆虫による刺傷、物理的損傷、生理障害等)でも同様の症状が見られることがあるが、これらは果実内部に硬化組織が形成されない点で区別出来る。また、リ病果は熟す

のがやや遅れ、その発生は、年や枝によって異なり、リ病樹にあっても翌年には発生しなかったり、一部の枝や同じ枝のある部分でしか発生しなかったりする。

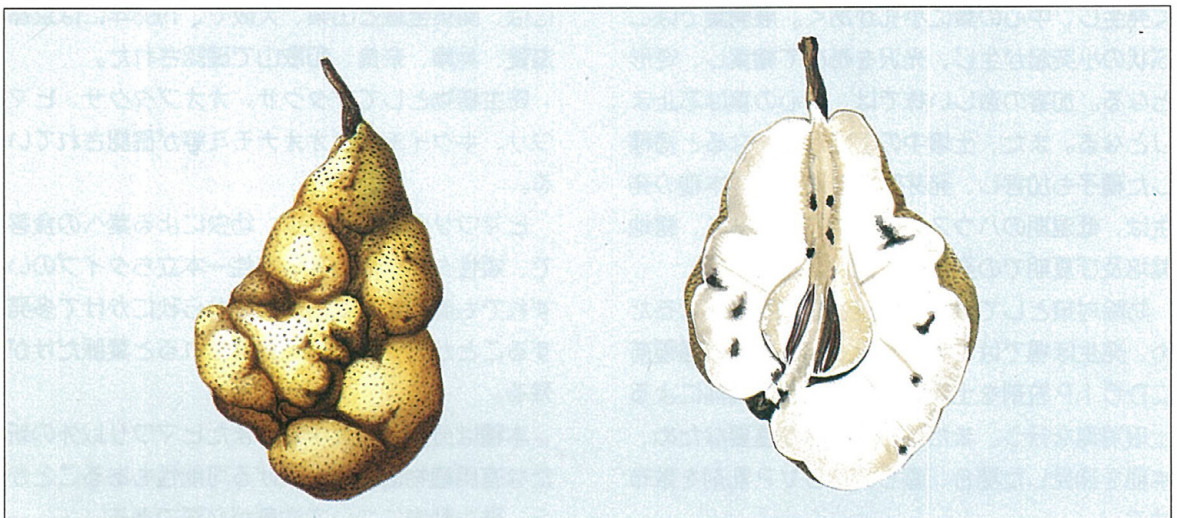
果実の他に、感受性品種では前年枝や当年枝の樹皮に複数の小さな突起が出現する。その下部の皮層は水浸状となるため、最終的には亀裂やえ死が生じる。

病徴が特に激しい品種は、Beurré Bosc、Doyenné du Comice、Seckelであるが、その他Beurré Hardy、Conference、Winter Nelis等40品種で発病が確認されている。なお、リンゴ、ボケ、マルメロ、ノイバラ等では、人工的に当病原体を接種しても、果実には病徴が現れなかったとの報告がある。

検定法 Beurré BoscもしくはBeurré Hardyに接木接種し、1～2年後に果実や若枝に生じる病徴により検定を行う。

被害 同一リ病樹でも病徴が出る年と出ない年があるが、病徴が出れば、感受性の品種はもちろん抵抗性品種でも、果実に多少のくぼみや奇形が生じるため、商品価値が無くなり経済的損失は大きい。

防除 無病健全な穂木や苗木を使用する。また、リ病樹を確認した場合は直ちに抜き取る。



マレーシアミバエ

学名: *Bactrocera latifrons* (Hendel)

英名: solanum fruit fly

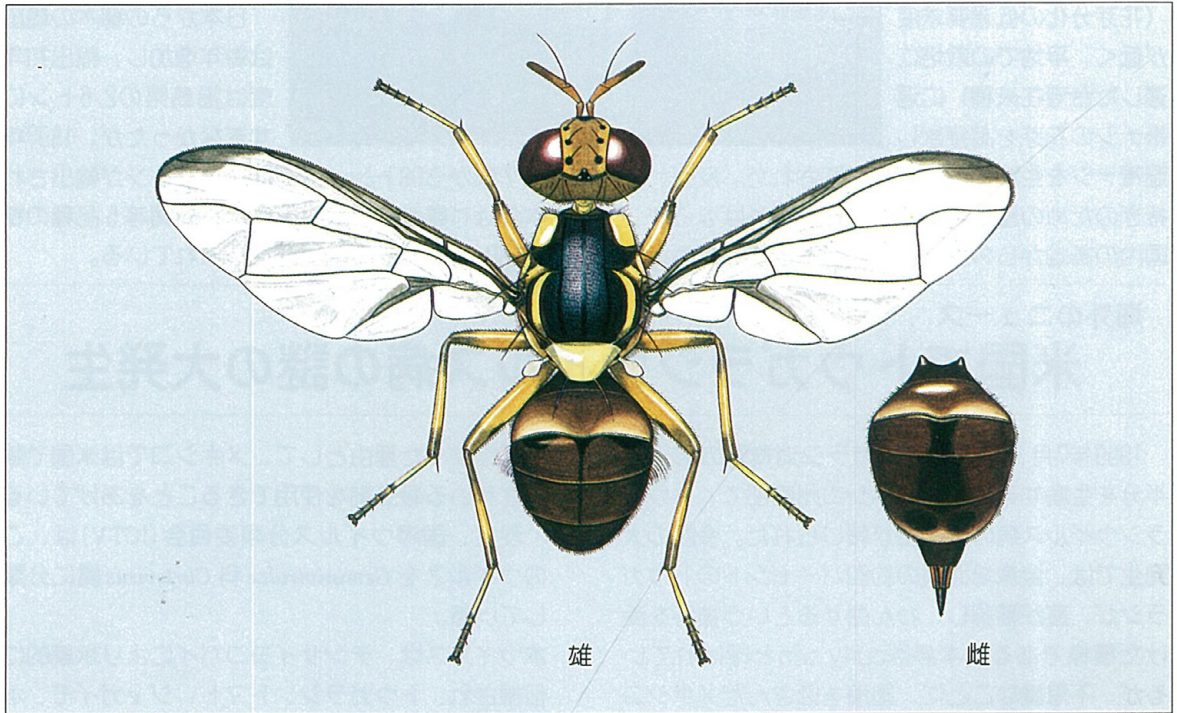
本種は主に東南アジアに分布し、トウガラシ等ナス科植物の重要な害虫となっている。日本の植物検疫ではミカンコミバエ種群に次いで発見事例が多く、その侵入を警戒している。

分 布 中国南部、台湾、ラオス、タイ、マレーシア、インド、パキスタン、スリランカ、ハワイ

寄 主 トウガラシ属、ナス属、トマト属等

に一对の後気門を持つ。前気門の瘤数は13~18個である。後気門孔周辺の剛毛は枝分かれしているが、基部で数えた場合、背側及び腹側で16~22本、側方で6~11本である。また口器の口縁後方のヒダ数は9~14である。

生 態 果実を加害する他のミバエ類と同様に雌成虫は寄主果実に産卵管を差し込み、産卵する。ふ化した幼虫は果実内で生育し、老熟すると果実から脱出して土中で蛹化する。ハワイにおける飼育調査では、26~27℃で卵期間が約2日、幼虫期



形 態 成虫は体長約6mm、頭部は顔に1対の楕円形の黒色斑がある。胸部背面は黒色で、2本の黄色縦帯を持つ。また、小盾板には1対の刺毛を持つ。翅は全体的に透明で前縁に黒色の帯がある。この黒色帯は翅端近くでやや膨れて黒色斑を形成する。腹部は全体的に褐色から赤褐色で、黒色の帯や斑紋がない。雌は産卵管を有し、産卵管先端部は3葉に分かれる。一見するとミカンコミバエ種群に似るが翅や腹部の斑紋、産卵管先端部の形態が異なることから識別できる。

老熟(3齢)幼虫は乳白色から黄白色のウジで、体長は7~9mm。胸部に一对の前気門と腹部末端

間が8~9日、蛹期間が10日、成虫の産卵前期間が11日という結果が得られている。本種には、ミカンコミバエ種群やウリミバエでよく知られているメチルオイゲノール又はキュウルアに誘引される性質が無い。

被 害 幼虫の寄生を受けた果実は食害によって腐敗する。特にトウガラシでの被害が大きく、60~80%の減収となる場合もある。イヌホウズキ等野生のナス科植物も好適寄主として知られている。

防 除 ほ場周辺部にマラソン等の殺虫剤とタンパク加水分解物を混合した毒餌の散布、野生寄主植物の除去が被害軽減に有効と言われている。